

# 飢肥 小倉処平

## ― 歴史を訪ねる旅 (6) ―



### 下土橋 渡

江藤淳は、著書「南洲残影」でいわく、西南戦争における官軍と薩軍の対決は、決して開明派と土着派の対決などという、単純な図式で割り切れるものではあり得なかった。西洋をよく知りながら西郷の軍に投じた者もいたのであると。そして、岩倉使節団の一員として欧米視察を果たした村田新八（西郷の自決を見届け享年42で戦死）の名をあげ、「飢肥西郷」と呼ばれ親しまれた小倉処平、佐土原藩（現宮崎市）藩主・島津忠寛の三男で七年間米国に学びアナポリス海軍兵学校で成業した島津啓次郎（城山にて享年22で戦

死）らの名をあげています。小倉処平もまた官命によって英国、フランスに留学した秀才でした。

### 一、飢肥藩と小倉処平

宮崎自動車道を田野ICで降りて、見渡す限りの杉の山林を眺めながら、県道28号を40分ほど下れば飢肥に着きます。日向伊東氏5万余石の飢肥藩の居城のあった飢肥は、飢肥城址を中心に武家屋敷、石垣、庭園などの史跡や商家造りの建物が城下町の名残を今なおとどめており、九州の小京都と呼ばれます。1977年（昭和52年）に九州・沖縄地方で初めての「国の重要伝統的建造物群保存地区」に選定された（全国的にも岡山県吹屋とともに我が国で2番目に選定された2地区のうちの一つである）ことから、その伝統的建造物群としての評価の高さが伺い知れます。

名物は、アジやトビウオなど季節の魚のすり身に黒砂糖などを加えて木の葉の形に揚げた独特の天ぷら「おび天」。美味しいものを頂き、歴史に触れながら小京都の佇まいのなかに散策すれば、これこそまさに旅の醍醐味と実感するわけです。

飢肥藩の領地は80年に渡って島津氏と伊東氏の攻防の場となりましたが、12代祐兵が豊臣秀吉の九州平定に付き従い、九州平定軍の先導役を務め上げた功績により領地を取り戻し近世大名として復活を遂げました。

山林と海浜に囲まれた耕地少ない小藩ゆえに財政は決して豊かではなく、約1、000ヘクタールにも及ぶ飢肥杉の美林は、飢肥藩の家臣たちが藩財政の窮乏を救済するために江戸時代の初め山林原野に杉を植林したのが始まりだといわれますし、幕末の飢肥藩は極度の財政難に陥り、嘉永4年（1851年）に

は藩士の家禄を3分の1に減じ、更に6年後には儉約令を出すほどでした。そんな中で教育熱心で、11代藩主・祐民の享和元年（1801年）に学問所を設け、これが天保元年（1830年）に藩校・振徳堂となりました。

小倉処平は、1845年（弘化3年）飢肥藩の中級藩士・長倉喜太郎の二男として生まれます。少年期を振徳堂に学び、18歳のとき同藩士・小倉九十九（つとむ）の養子となります。1864年（元治元年）に藩命で京都に出、藩の外交に飛び回りまわり、帰藩すると振徳堂の句読師（読み書きを教える人）となり、また寮舎長にも選ばれました。小倉の指導理念は、広く世界へ目を向ける必要性を説く進歩的なものだったといわれ、塾生から尊敬を集めていたそうです。間もなくして江戸に出て、飢肥藩清武郷（現宮崎県清武町）出身の儒学者・安井息軒の門下生として江戸の三計塾に



飢肥城大手門。1978年（昭和53年）に、樹齢百年の飢肥杉を使用し、釘を使わない「組み式」で復元されました。



武家屋敷通り（馬場通り）。飢肥藩屋敷の典型的な姿を色濃く留めています。

学び、このとき、同じ門下生であった陸奥宗光や谷干城たにたてき（第2代学習院長）らと交流を得ます。

## 二、小林寿太郎と小倉処平

1861年（文久元年）、小柄で病弱ながら頭がよく、とても好奇心旺盛な6歳の男の子が振徳堂に入学してきました。大家族で豊かとはいえない環境にあったその男の子は学費免除のため、学校の掃除、生け垣の刈り込みなどの仕事をしながら人一倍勉学に励み評判となったそうです。のちに陸奥宗光に見出され、外務大臣、ポーツマス条約の全権大使として活躍する小村寿太郎でした。

早くから寿太郎の非凡な才能を見抜いていた小倉処平は、1869年（明治2年）、特別の推薦を藩に上げ、15歳でないと入寮できない振徳堂東寮に14歳の寿太郎を入寮させます。そして、寿太郎をより良い環境へ導

くべく公費による留学制度を藩主に進言し、自ら引率して長崎の洋学校・致遠館に遊学させます。さらに、大学南校（現東京大学）に進学させるべく寿太郎を伴って東京へ旅立ちます。しかし、当時の大学南校は雄藩出身者で独占されていました。そこで、処平は、小藩出身の人材にも等しく勉学の機会を与えるべきだと「貢進生制度」を政府に建議し実現させ、小村寿太郎を入学させました。これによつて、寿太郎は後に大成する契機を得たのでした。

## 三、小倉処平留学、そして帰国

「貢進生制度」建議の功績によつて文部権もんぶごん大丞だいじょうの職についた処平は、官命によつて英国、フランスに留学して、政治や経済を学びますが、数十名の留學生の内、学識において処平の右に出る者はいなかったといわれます。また、その風采は、のちに郷党から「飢肥西郷」



飢肥藩校・振徳堂。孟子の教えにある「又從而振徳之」（また疑いてこれを振徳せり）より名づけられました。



「小倉処平顕彰之碑」（振徳堂敷地内）





武家屋敷通りの一面にある小村寿太郎生家

と呼ばれ親しまれたように、生来肥満堂々とした風貌だったといわれます。

処平は最初、教育制度を調査するためにアメリカに向いましたが、途中で、植民地となった国民の姿を目にしたとき、政府による急な欧米化政策や藩閥政治による弊害に大きな危機感を抱き、当初の予定を変更して、親友の香月圭吾と共にイギリスに渡って、経済を研究することになりました。

留学の途について2年後の1873年（明治6年）冬、国内で征韓論が決裂したことを知ると急遽帰国。西郷隆盛・板垣退助らが下野すると、自らも飢肥に帰郷。翌年、明治政府に対する土族反乱の一つである佐賀の乱が勃発し、敗れたリーダーの江藤新平らが処平を頼ってひそかに飢肥へ潜入してくると、港から土佐へ逃亡させました。その罪で小倉処平は禁錮刑に服するも、その後、大蔵省七等出

仕となります。

#### 四、西南戦争

1877年（明治10年）2月、西南戦争が勃発すると、「日向の人心を鎮撫してくる」と唱えて帰郷しましたが、すでに飢肥士族300名が前線にあることに義を感じた処平は自らも身を投じ、飢肥隊の総帥として、人吉撤退後は野村忍介率いる奇兵隊の奇兵隊軍監として、各地を転戦しました。

しかし、西南戦争最後の決戦となった同年8月15日の「和田越の決戦」（現宮崎県延岡市）で、政府軍は、薩軍3500に対して5万の兵で攻撃。処平はこの戦いで大腿部に銃創。敗走後、延岡市川坂の神田伊助宅に逃れて加療。

一方、敗れた薩軍は長井村に包囲され、俵野の児玉熊四郎宅に本営を置いた西郷隆盛は翌16日、解軍の令を出し、可愛岳突圍を決

め、約600名の精鋭部隊が17日夜10時に児玉熊四郎方を発して可愛岳に登り始めます。神田伊助宅で加療中このことを知った小倉処平は西郷の後を追ったものの果たせず、可愛岳登山口から南西約1キロメートルのところにある高畑山の中腹で自刃。惜しまれる32歳の若さでした。自刃の地には碑が建てられています。



「飢肥西郷小倉処平自刃之地」の碑

## 【参考にした図書とサイト】

- ・江藤淳著「南洲残影」（文藝春秋社、1998年3月初版）
- ・小村寿太郎侯顕彰展資料 小村寿太郎侯と藩校振徳堂の教官たち
- ・みやざきの101人⑥小倉処平

## ―補遺―

非凡な才能を持ち、かつ人一倍の努力家ながら不遇の連続だった小村寿太郎には、幸運な、二人の人物との出会いがありました。幼年期から青年期にかけての小倉処平とそののちの陸奥宗光です。寿太郎は、第1回文部省海外留学生に選ばれ米国ハーバード大学へ2年間留学し法律を学びました。そこでも優秀な成績を修め、身長143センチという小さな体の寿太郎に対して他の学生たちが帽子を脱いで挨拶するほど尊敬されたそうです。小

村寿太郎と小倉処平の年譜を突合せてみると、ハーバード大学入学が1875年、寿太郎21歳のとき。佐賀の乱が勃発した翌年のことでした。そして、小倉処平が延岡の山腹で自刃したその年に、寿太郎はハーバード大学法律科を卒業しました。それから3年後の1880年に米国留学を終えて帰国した小村寿太郎が真っ先に向かったのが小倉処平の墓でした。寿太郎はそこでいつまでも号泣し続け、立ち去ることがなかったといわれます。

（元九州職業能力開発大学教授）

